様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０１８４３

研究課題名（和文）近世都市飛騨高山の人口と家族　～宗門改帳を史料としたデータベース構築にむけて～

研究課題名（英文）Population and Family Structure in the Early Modern City of Hida Takayama

研究代表者
岡田　あおい（OKADA, Aoi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：５０２４６００５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最終目標は、近世都市の人口と家族を歴史人口学の手法を用いて解明することである。飛騨高山には残存期間が99年に及ぶ宗門人別改帳が残存する。本研究期間はデジタル化された飛騨高山弐之町村の宗門人別改帳から基礎シート（BDS）を作成し、この史料の特徴を整理した。また安永2（1773）年から寛政12（1800）年までのBDSをデータベース化し、人口と家族(世帯)について観察した。この期間の人口は男性の方が多いものの較差は小さい。ここには、女性を必要とする社会構造が存在した可能性がある。世帯数は700前後を推移しているが、家持の世帯数は安定的であり借家の増減は多きい。平均世帯規模は3.7人である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　歴史人口学では残存する数少ない史料を用いて、近世都市の人口研究を行ってきた。その中心は人口指標の分析であり、本格的な家族（世帯）の分析は見られない。本研究は近世都市の家族について歴史人口学の手法を用いて解明すること、具体的には近世都市の家族（世帯）の構造と定住率を解明する。本研究期間は、研究の基礎作業である高山弐之町村の基礎シート（BDS）を慶應4(1868)年まで完成させ、データベースの構築を開始した。完成したデータの一部を利用した観察は始めたが、この研究が完成すれば家族社会学の家族（世帯）構造研究を進展させることにつながり、また歴史人口学の近世都市研究に新たな地平を切り拓くことになる。

研究成果の概要（英文）：The ultimate goal of this study is to elucidate early modern urban population and families(households) using historical demographic methods. In Hida Takayama, there are Shumon-Ninbetsu-Aratame-Cho, with 99 years (1773-1871) of records remaining.
　In this research period, a Basic Data Sheet (BDS) was created from the digitized Shumon-Ninbetsu-Aratame-Cho of Hida Takayama Ninomachi village, and the characteristics of this historical document were organized. We also compiled a database of BDS from 1773 to 1800 and made observations on population and families (households). The population during this period had more male, but the difference was small. It is possible that a social structure existed in Ninomachi village that required women. The number of households has remained around 700, but the number of house owner households has remained stable, while the number of renter households has increased and decreased significantly. The average household size is 3.7 persons.

研究分野：家族社会学

キーワード：歴史人口学　家族社会学　家族史　近世都市　飛騨高山　宗門改帳　基礎シート（BDS）　世帯構造

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近世都市の歴史人口学的研究は史料の乏しさを克服し蓄積されてきているが，その中心は人口指標の分析である．近世都市では人的移動とともに，世帯の移動も激しいといわれているが，本格的な実証研究があるわけではない．先行研究としては髙橋美由紀の在郷町郡山上町の家族形態の分析と浜野潔の京都の宗門改帳を史料とした世帯構造の分析がある（髙橋 2005，浜野 2007）．浜野は，京都縁辺部志水町の借屋世帯の転出入について分析し，借屋世帯の 4 割が 1 年以内に転出し，平均居住年数は約 3 年であることを発見している（浜野 2007: 113–143）．また，1859 年から 1863 年までの京都の 16 の町の宗門改帳の横断面的分析から世帯構成の特徴として世帯内の子ども数は少なく，嫁・婿といった続柄のものが農村に比べて非常に少ないと述べている（浜野 2007: 147–170）．近世都市の人口移動は農村に比べ激しいため，引っ越しが多かったといわれているが，長期間残存する史料を用いた研究は管見の限り存在しない．果たして，近世都市では引っ越し（世帯の移動）が多かったのだろうか．階層による違いはあったのだろうか．また，都市の家族（世帯）構造は農村の家族（世帯）構造と異なるのだろうか．異なるとすればどのような特徴があるのか．近世都市の家族（世帯）の研究は，歴史人口学の一つの大きな研究テーマであると思われるが，本格的な研究は数少ない．この研究が完成すれば，歴史人口学の都市研究を進展させることになり，また家族社会学の家族（世帯）構造研究にも新たな地平を切り拓くことにも結び付くと考える．

２．研究の目的

近世都市の家族（世帯）の定住率とその構造の特徴を解明すること，これが本研究の最終目標である．筆者はこれまで近世農村社会の家族（世帯）構造を研究してきた．農村社会の家族（世帯）構造と比較することで近世都市の家族（世帯）の特徴も明確になるものと確信する．信州山村 2 か村（信濃国筑摩郡南熊井村・信濃国諏訪郡横内村）の宗門改帳のデータベース化もほぼ完成している．比較的接近している地域内の都市と農村の家族（世帯）構造の比較も可能である．近世農村の家族（世帯）を研究する場合，60 年程度連続する史料があれば家族周期の観察をすることができる．したがって，農村の家族(世帯)と比較するためにも，60 年程度連続する都市の史料を分析することが望ましい．飛騨高山の宗門人別改帳（飛騨高山の宗門改帳の表題は，統一されているわけではないが，例えば『飛騨大野郡灘郷東川原町巳宗門改人別御改帳』とあるように，宗門人別改帳という記載が多数を占めているので，本研究では高山の宗門改帳については宗門人別改帳と称することにする）は，このテーマに取り組むことを可能にする．

本研究が史料とする近世都市飛騨高山弐之町村の宗門人別改帳は，残存期間が 99 年（1773 年～1871 年）に及び，この間一年の欠年もない(ただし，一部の組が欠けている年はある)．弐之町村の 1773 年の人口は 2614 人である．これだけの人口規模をかかええ，情報量も豊富な良質な近世都市の史料は発見されていない．この史料は，1960 年代にマイクロフィルム（全 71 巻：68914 コマ）に収められ，現在は麗澤大学人口・家族史研究プロジェクト室（代表：黒須里美）に保存されている．この貴重な史料は千葉大学名誉教授故佐々木陽一郎により研究が進められ，一連の人口指標に関する研究が蓄積されている．佐々木が作成した基礎シート(以下 BDS と略す)は，岡田研究室が引き継ぐことになり確認作業を行なってきたが，佐々木が作成した当時は整理方法も定まっておらず，試行錯誤が繰り返されていたようでこのシートを再利用することは難しかった．そこで本研究は，マイクロフィルムに撮影されている飛騨高山の宗門人別改帳をデジタル化し，新たに BDS を作成するという新たな目的を設定し，作業を開始した．なお，佐々木は宗門人別改帳に登場する人物について個人カード(40290 人分)を作成し，大型コンピュータでデータを処理し，人口指標を分析し，研究成果を発表している(佐々木 1969，2001)．したがって，BDS は直接研究には関係がなく，佐々木の分析および研究成果の信頼性が失われることはない．

本研究の第一段階の目的は，BDS の作成である．BDS の作成は，すでに「2018 年～2020 年科学研究費補助金　基盤研究（C）近世都市飛騨高山の人口と家族 ～宗門改帳を史料としたデータベース構築にむけて～」（研究代表者：岡田あおい）でおこなったが史料が膨大であるため完成するには至らず，本研究はこの第一段階の作業を継続し完成させることが第一の目的である．そして，第二段階の作業であるデータベースの構築が第二の目的となる．

データベースの構築までにはかなりの時間を必要とするが，データベースが完成すれば，近世都市の人口と家族の分析が可能になる．本研究は家族社会学の視点を取り入れ学際的な研究を目指す．筆者は，これまで近世農村の家族（世帯）構造を中心に研究を進めてきた．家族（世帯）に関する本格的な実証研究自体，数が多いわけではない．筆者がこれまで進めてきた近世農村の家族（世帯）構造と比較することにより，近世都市の家族(世帯)の特徴を明らかにしたい．近世都市と農村の家族（世帯）構造には違いがあるのか，あるいは共通点が見出せるのか，人口移動と家族（世帯）構造に関係性はあるのか，歴史人口学と家族社会学の学際的研

究に新たな研究領域を創造することになる．具体的には，人口指標に加え，世帯の持続期間，世帯構成，世帯構成のサイクルを指標とし近世都市の家族（世帯）の特徴を解明する．

３．研究の方法

近世都市高山の宗門人別改帳から BDS を作成し，これを基にデータベースを作成し，データ分析を行い，近世都市の研究を完成させることが本研究の最終目的である．しかし，この研究を達成するには，史料が膨大であるために長期計画を立てなければならない．研究段階を数段階に分けて研究を進める．まず，第一段階として史料から BDS を作成する．この作業は基本的な作業であるが，研究全体の 8 割近くの時間を費やす，また多額の人件費を必要とする作業である．BDS が完成した段階で，第二段階のデータベース構築作業を開始する．データベース作成には，すでに筆者が構築済みのフォーマットを利用する．数回のデータクリーニングを経てデータベースが完成した段階で，第三段階の分析作業，具体的には基本的な人口指標，家族指標について分析をおこなう．この分析結果は，近世都市の人口調整メカニズムの研究に貢献することができるだろう．次の最終段階では歴史人口学，家族社会学の研究者数名とプロジェクトを立ち上げ，既存の近世都市人口研究を含めた「近世都市の人口と家族」の本格的な研究をスタートさせる計画である．このプロジェクトはこれまで研究者が個別に研究を進めてきた近世都市の研究を一挙にまとめ総合的に，また比較の視点を取り入れて都市研究を展開させる．本研究はこのように大きなプロジェクトを組織し，歴史人口学と家族社会学の学際的研究を進展させることが可能な，また新たな研究領域を創造させるものである．

本研究期間は，その第一段階から第二段階への移行期として位置付けられる．筆者は「2018 年～2020 年科学研究費補助金　基盤研究（C）近世都市飛騨高山の人口と家族 ～宗門改帳を史料としたデータベース構築にむけて～」（研究代表者：岡田あおい）の助成を受け，飛騨高山の宗門改帳のマイクロフィルム（68914 コマ）をデジタル化するとともに，これを紙焼きし，BDS の作成を開始した．史料を解読する中で，BDS に書ききれない貴重な情報の記載があることも判明し，この情報を記録する作業も並行して行うことにした．このような理由から BDS 作成作業は当初の予定から大幅に遅延した．本研究期間は，BDS の完成を第一目標にしながら、このシートに書ききれない情報の記録を整理し，さらにデータベース構築のためにデータ入力を開始する．作業には膨大な時間がかかり，短期間に研究結果を発表することは困難であるが，壮大な研究の可能性をもつ本研究にとって，BDS の作成とデータベースの構築を研究の要として位置付けている．

４．研究成果

本研究期間の成果は，大きく分けて四つある．

第一は，「2018 年～2020 年科学研究費補助金　基盤研究（C）近世都市飛騨高山の人口と家族 ～宗門改帳を史料としたデータベース構築にむけて～」（研究代表者：岡田あおい）に引き続きおこなってきた 99 年（1773 年～1871 年）間に及ぶ飛騨高山弐之町村の宗門人別改帳（マイクロフィルムデジタル版）から 1868 年まで BDS を完成させたことである．第二は，弐之町村の宗門人別改帳の特徴を整理したこと，第三はデータベース構築を開始し，1773 年から 1800 年までの入力を終了した点である．そして第四は，プリテストという意味も含めて，構築したデータベースを使って 1773 年から 1800 年までの人口と家族に関する基本的な指標を作成し，観察した点である．以下，研究で得た知見を述べる．なお，史料について論じる際には西暦と和暦を併用して記述することにする．

(1) 近世都市飛騨高山町と史料の概略

飛騨高山町は，飛騨地方のほぼ中央部に位置する．高山盆地に宮川を挟んで南北に発展した町である．1586 年金森長近が入封し多賀山に高山城を築き，三代目重頼の時代に宮川以東(現在の江名子川以南)の地に築かれた城下町は，左京屋敷，向屋敷の建設に伴い江名子川以北，そして宮川以西の地域に拡大していった（高山市 1981：220-21）．1692 年 7 月旧金森領飛騨一国は幕府直轄領となり，陣屋がおかれ，高山城と侍屋敷は破却され，町人の町となり飛騨国の商工業の中心地となった．

町人町は，宮川の流れに沿って南北に東から西へ，一番町，二番町，三番町が築かれた．町は次第に北に発展し，一之新町，二之新町，下新町が，また向町，下向町が宮川の西に誕生した．法制的には，幕府直轄領となったことから，一番町は壱之町村，二番町は弐之町村，そして三番町は参之町村と村扱いになった（末田 2018：189）．1695 年屋舗検地帳によると，三町の屋舗合計は 22 町 4 反余，石高合計 204 石 5 斗余，家数 1259 である（平凡社地方資料センター編 1989：951）．壱之町は，多賀山の北麓，宮川と江名子川に挟まれた平坦地のほぼ中央部に位置し，南北 6 町 29 間の細い町域である．東西に横切る安川通によって二分されていて，南半分を上町，北半分を下町といった．壱之町は当初より町人町として成立し，商家が軒を並べているが，有力商人の多くが酒造業である．なかでも金森氏時代に町代を勤め，幕府領下で町年寄となった矢島家，大坂屋吉右衛門がこの町に属する．弐之町村は，1695 年の屋舗検地帳によれば，弐之町・弐之新町・下新町からなり，三町合わせて屋敷 5 町 4 反余，分米

49 石余とある．弐之町村に属する弐之町は壱之町の西に接しており，金森長近が城下町経営にあたって造った三筋の町人町のうちの二番町である．弐之町は金森氏の城下経営当初より町人町として成立し多くの商家がある．飛騨第一の豪商と言われた大坂屋七左衛門はこの弐之町で商いを営んでいた．弐之町は，1694 年の検地によれば屋敷 3 町 7 反余，分米 37 石 8 斗余，屋敷持 193，家数 222 であった．弐之町の西に位置する参之町村は，金森氏時代の三番町である．1695 年の屋舗検地帳によれば，参之町・片原町・上川原町・西川原町・八軒町・中川原町・川原町・東川原町・向町・下向町からなる．この 10 村合わせて屋敷 7 町 9 反余，分米 72 石余りである．参之町村に属する参之町は，屋敷 3 町 7 反余，分米 37 石 9 斗余，屋敷持 218，家数 233 である．町人の町として発展した参之町には豪商も少なくなかった(平凡社地方資料センター編 1989：972)．

各町村には，世襲の町年寄（壱之町矢島家，弐之町川上家，参之町屋貝家）が配置されている．町年寄の下に，各組に一人組頭が置かれ，五人組頭と区別するために町組頭と称されている．町組頭が病気療養の場合や後継者が不在の場合など勤務が難しい場合は高山御役所の許可を得れば，「〇〇預組」とし一時隣の町組頭に兼務を頼むことができた（高山市 1981：306)．組数は一定ではなく，1724 年 4 月には，壱之町村 10 組，弐之町村 15 組，参之町村組 12 組，計 37 組が存在した（高山市 1981:303)．

この 3 町村を含め飛騨高山には宗門人別改帳が存在する．史料は，飛騨高山まちの博物館(旧高山市郷土館)に所蔵されている．この史料は，速水融が佐々木とともにマイクロフィルムに収めたと聞いている．史料は，『飛騨国高山壱之町村宗門人別帳』（表書は一定ではなく異なる場合もあるが，本報告書ではこの名称に統一する．弐之町村，参之町村の宗門人別改帳の名称も同様である）の残存期間は，1819（文政 2)年より，1871(明治 4)年までの 53 年分が欠年無く連続して残っている．『高山弐之町村宗門人別改帳』は，1718（享保 3）年，1719（享保 4）年，1773（安永 2）年から 1871（明治 4）年まで連続して 99 年分が残っている．『飛騨国高山参之町宗門人別帳』は，連続して残っている期間はないが，1793（寛政 5）年，1805（文化 2）年，1813（文化 10）年，1818（文化 15）年，1827（文政 10）年，1829（文政 12）年，1871（明治 4）年の 7 年分の史料が残っている．この 3 町村以外にも，『高山照蓮寺門前寺内町村宗門人別改帳』1825（文政 8）年，1828（文政 11）年，1831（天保 2）年，1833（天保 4）年，1835（天保 6）年，1837（天保 8）年，1841（天保 12）年，1844（天保 15）年，1845（弘化 2)，1847（弘化 5）年，1851（嘉永 4）年，1854（嘉永 7）年，1857（安政 4）年，1860（安政 7）年，1862（文久 2）年，1865（元治 2）年，1866（慶應 2）年，1868（慶應 4）年がマイクロフィルムに収められている．
本研究では，弐之町村の宗門人別改帳の BDS を作成した．弐之町村の宗門人別改帳は，1718（享保 3)，1719（享保 4）年，1773（安永 2）年から 1871（明治 4）年まで計 101 年分残存しているが，連続する安永 2(1773)年から明治 4(1871)年までの宗門人別改帳を史料とし，BDS を作成し，データベースを構築している(継続中)．近世都市飛騨高山町と宗門人別改帳の特徴については，詳しくは拙稿を参照されたい（岡田あおい：2024)．

(2) 弐之町村の宗門人別改帳の特徴

本研究で扱う弐之町村の宗門人別改帳の特徴を明らかにする．
弐之町村の宗門人別改帳の編纂は，村単位ではない。宗派別になったり，いくつかの組が合冊で綴じられることもあるが，観察期間を通して基本的には組単位の分冊になっている．『高山市史』に「安永 2 年より明治 4 年までの高山弐之町村の『宗門人別改帳』が，袋入りで 90 数袋ある」と記されている(高山市 1981：293)ように，宗門人別改帳は，一年分が一袋に収められている．

1773（安永 2）年から 1868（慶應 4）年までの宗門人別改帳を整理した結果，確かに 99 年間の史料は存在するが，1773（安永 2）年上川原町松田屋吉右衛門組，1782（天明 2）年弐之町米屋治兵衛組，1807（文化 4）年弐之町米屋治八郎預り組，1773（安永 2）年，1775（安永 4）年，1776（安永 5）年，1783（天明 3）年，1793（寛政 5）年，1796（寛政 8）年，1798（寛政 10）年，1802（享和 2）年，1805（文化 2）年，1807（文化 4）～1810（文化 7）年，1812（文化 9）～1815（文化 12）年，1819（文政 2）年，1823（文政 6）～1824（文政 7）年，1827（文政 10）～1868（慶應 4）年町年寄川上家の宗門人別改帳が欠けていることが判明した．

弐之町村の宗門人別改帳のまとめ方は一定していない．宗門人別改帳の組名，編纂方法，記載事項の順に整理する．

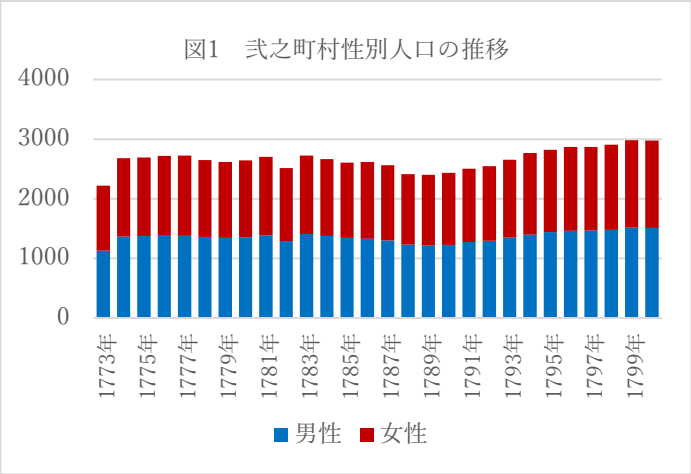
宗門人別改帳の組名の変遷を追っていくことにしよう．前述した通り 1773（安永 2）年の宗門人別改帳は一組分の欠落があるので，1774（安永 3）年の宗門人別改帳に記載されている組名を観察する．預り組を含め弐之町 9 組（四瀧屋孫兵衛組，林屋利兵衛組，林屋利兵衛預り組，米屋治兵衛組，高桑屋与右衛門組，高桑屋与右衛門預り組，和泉屋勘兵衛組，福嶋屋五右衛門組，浅野屋喜右衛門組)，弐之新町 1 組（谷屋九兵衛組)，東川原町 2 組（村田屋惣兵衛組，林屋兵右衛門組)，西川原町 1 組（中村屋治助組)，上川原町 1 組（松田屋吉右衛門組)，中川原町 1 組（中村屋治助組)，下新町 1 組（直井屋七兵衛組)，計 7 町 16 組である．この組別の宗門人別改帳は，観察期間中町組頭の交代や組の統合はあるが，1871（明治 4）年まで追跡することができる．

次に，宗門人別改帳の編纂単位について観察する．宗門人別改帳は，1773（安永 2）年から 1776（安永 5）年までは上述した組別にまとめられ分冊になっているが，1777（安永 6）年以降，組内で宗派別にまとめるという形式が見られるようになる．そして，1778（安永 7）年と 1811（文化 8）年から 1821（文政 4）年までは弐之町村全体を宗派別（真言宗，修験宗，浄土宗，法花宗，禅宗，浄土真宗）に記載するという形にかわっている．しかし，この形式はこの期間のみであり，それ以外は組別，あるいは組内宗派別という形である．このように，弐之町村の宗門人別改帳の編纂単位は一定しているわけではなく，組別，組内宗派別，宗派別という 3 つの単位が混在している．この点が弐之町村宗門人別改帳の編纂の特徴である．なお，町年寄川上屋（川上斎右衛門）は，宗門自分一礼として川上屋のみの宗門人別改帳を作成している．また，1780（安永 9）年から 1789（天明 9）年の間は弐之町村瀬屋孫兵衛組の 3 戸，弐之町土田屋小左衛門組の 3 戸，弐之町米屋治兵衛組の 5 戸の計 11 戸は各組の宗門人別改帳から除され，町年寄支配の宗門人別改帳として独立している．

このように表題ばかりでなく，編纂の単位も一定しているわけではないが，記載内容はほぼ変わらない．宗門人別改帳は「現住地主義」で書かれており，一筆ごとに宗旨，旦那寺，持高（1774 年以降），家持・借家・家守・地借の別，名前，続柄，年齢，移動記録，一筆の〆人数，家請人記載，そして帳末には〆人数（組の合計人数）と村高（安政 3 年以降）が記載されている．宗門人別改帳の記載内容は豊富で，移入者に対しては出身地が，移出者に対しては行き先が記載されている．また，屋敷の売り買い，町内を含めた引越し先，あるいは引越し元，といった詳細な外書きが記されている．記載内容が豊富である点もこの宗門人別改帳の特徴の一つである．

(3) 人口と世帯数

完成したデータベースをもちいて，1773 年～1800 年までの人口と家族に関する基本的な指標を観察した．



人口については，観察期間 2 回にわたる人口減少期が認められた（図 1）．特に 1784 年から 1789 年にかけては大きな人口減少が認められた．男女別人口は観察期間を通して男性の方が多いものの較差は小さい．弐之町村には，女性を必要とする社会構造が存在した可能性がある．世帯数は 700 前後を推移した．これを居住形態別に観察すると，家持の世帯数は観察期間を通して安定的であり，借家の世帯数は増減の幅が大きいことがわかる．また，平均世帯規模は 3.7 人で，家持の世帯規模の方が大きく，観察期間を通して家持と借家の平均世帯規模の差は縮まることはなかった．また，弐之町村では家持が安定的に屋敷を所有しているわけではなく，質に流したり，また質流れの屋敷を借家住まいの者が所有したり，その入れ替わりも大きい．これこそが弐之町村の特徴だと思われる．

まずは，BDS とデータベースを完成させることが次の目標であるが，完成したデータベースを基に人口動態の観察と家持と借家の家族(世帯)の分析をおこなうことを課題にしたい．

〈引用文献〉

①髙橋美由紀，2005,『在郷町の歴史人口学 -近世における地域と地方都市の発展-』，ミネルヴァ書房.
②浜野潔，2007,『近世京都の歴史人口学的研究　都市町人の社会構造を読む』,「慶應義塾大学出版会.
③佐々木陽一郎，1969,「飛騨国高山の人口研究　―人口推移と自然的要因―」，社会経済史学会編『経済史における人口 ： 社会経済史学会第 37 回大会報告』，慶應通信.
④佐々木陽一郎，2001,「飛騨高山の宗門人別帳　―人口史料としての宗門人別帳の史料批判と若干の結果―」,『千葉大学経済研究』，第 16 巻第 3 号.
⑤高山市，1981,『高山市史上巻(復刻版)』，高山印刷株式会社.
⑥末田智樹，2018,「社会経済を主体的に担った有力商人」，林上編著,『飛騨高山　地域の産業・社会・文化の歴史を読み解く』，風媒社.
⑦凡社地方資料センター，1989,『日本歴史地名大系第 21 巻　岐阜県の地名』，平凡社.
⑧岡田あおい，2024,「飛騨高山弐之町村の宗門人別改帳　―史料の特徴と 1773 年～1800 年の人口・世帯―」,『哲學』，第 153 集.

＊BDS の作成は上田美枝子氏の協力なくしてはあり得ませんでした。ここに記して感謝します。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岡田あおい	４．巻 第153集
２．論文標題 飛騨国高山弐之町の宗門人別改帳　ー史料の特徴と1773年～1800年の人口・世帯ー	５．発行年 2024年
３．雑誌名 哲學	６．最初と最後の頁 211-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 池岡義孝、石井クンツ昌子、稲葉昭英、落合恵美子、田間泰子、西野理子、野沢慎司、山田昌弘、岩井紀子、岩井八郎、岩澤美帆、上野加代子、岡田あおい、他	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 754
３．書名 家族社会学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

岡田あおい「世帯構造と世帯継承からみた村落社会」『日本人口学会　報告書　歴史人口学の課題と展望』日本人口学会研究委員会編、日本人口学会オンライン公開、pp.91-100 。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関